

新潟大学の新しい授業

——教養・総合科目…平和を考える——

山崎 健

新潟大学では、一九九一年二月の大学審議会「大学教育の改善について（いわゆる「大綱化」）」をうけて改革論議が始まった。

カリキュラムの改革は、九三年度からの入学生に対して各学部の新カリキュラムでの教養科目がスタートした。総体的な単位数の見直しと削減、外国語科目の小人数開講（といっても三十名）や総合科目の新設等があり、各学部とも期待と不安の「新しいスタート」でもあった。しかし、人文・社会科学系学部の学生が自然科学系の授業をほとんど聴講しないという現象に象徴的なように、各学部カリキュラムの目指す学生像と教養教育の理念（学生の要求と教養教育の実態？）

との整合性の論議が不十分であることなどが指摘された。また、学生の「自然科学離れ（特に数学・物理に顕著）」に対する講義内容や方法の問題（「人文・社会科学系の学生に対する自然科学概論」の必要性等）、人文学部での一年生向けの小人数ゼミの開講の評価など幾つかの教養・専門教育の内容にかかわる論議が行われ、ワークショップやシンポジウムも開催された。

このような中で、「総合科目…平和を考える」が九四年度よりスタートするわけであるが、その開講の経緯には十年間におよぶ新潟大学の平和運動が大きくかわっている。

一九八五年に世界的規模で提起された「ヒロシマ・

ナガサキからの「アピール」署名運動は、新潟大学でも積極的に取り組まれ、同年七月には教職員三三七名の賛同による「核兵器全面禁止を求める新潟大学人アピール」が発表され、一年後に一万名、二年後には二万名と目標を大きく上回り、新潟市の住民過半数二十三万名達成に大きな役割を果たした。

八六年十二月に、この「アピール署名運動」の成果とその継続・発展を願い、軍学共同研究の推進といった状況が進もうとするなかで、大学に働くものの社会的責任の意思表示を行う必要があるのではないかとということが論議となり、新潟大学で「非核宣言」を制定しようという運動が始まった。

この非核宣言運動は、八五年の小樽商科大学に始まり八七年一月の名古屋大学、七月の山梨大学、八八年一月の茨城大学と続き、新潟大学でも八八年三月に教職員の過半数を越える賛同署名を得て「非核平和宣言」が制定された。

そして今後の運動のあり方が論議される中から「平和講座」がスタートした。第一回は、昭和天皇の病氣療養にかかわるマスコミの異常報道と「Xデー」問題がとりざたされる中で、八八年十一月に成嶋隆氏（法学部）による「日本国憲法と天皇問題」が、十二月には古厩忠夫氏（人文学部）による「日中戦争と戦争責

任——南京大虐殺をめぐる論争を通じて——」が開催され、教職員・院生・学生等の参加を得て好評であった。

以後の平和講座は、第三回「日の丸・君が代の系譜とその争点」（教育学部：阿部好策氏／一九八九・一・三一）、（共同開催）「二・二四天皇問題を考える研究集会」（教養部：石崎誠也氏／新潟日報労組：岡本宏氏／一九八九・二・二四）、第四回「原爆開発と科学者——非核平和宣言制定一周年を記念して——」（理学部：小林迪助氏／一九八九・五・一二）、（共同開催）「中国政府の武力弾圧・人権抑圧に抗議する六・二二新潟大学集会」（人文学部：古厩忠夫氏／経済学部：小山洋司氏／一九八九・六・二二）、第五回「原子力発電所問題を考える」（教育学部：小林昭三氏／一九八九・一〇・二〇）、第六回「日米合同関山演習のねらいと現状」（新潟県平和委員会：五十嵐完二氏／一九九〇・一・二六）、第七回「ペレストロイカと東欧の民主化」（経済学部：小山洋司氏／一九九〇・五・三一）、（共同開催）「二・二二天皇問題を考える集会」（法学部：成嶋隆氏／理学部：斎藤文一氏／医療短大：溝口敏廣氏／人文学部：糟谷憲二氏／一九九〇・一一・一二）、第八回「トーク・イン 湾岸戦争」（法学部：多賀秀敏氏／人文学部：芳井研一氏／一九九一・二・一五）、第九回「南京事件を考える——発見

された新しい事実を素材として——」(女子栄養大学・藤原彰氏／一九九一・九・一二)、第十回「PKO法案を考える」(法学部・成嶋隆氏／一九九一・一二・四)と継続する。

「平和を考える」の実現については、以上のような十年間にわたる新潟大学の非核平和運動の積み重ねとそれを支えた関係教職員、学生の絶大な支援があった。その意味では、この授業は「新潟大学全体の財産」であるといえるのではないだろうか？

この平和講座を全学生向けの授業にしたいとの願いは、関係各位の尽力により九四年度より実現した。以下にそのシラバス(授業計画)を示す。

【講義内容】

日本における平和教育の問題は、第二次世界大戦末期の広島・長崎への原爆投下の問題にはじまり、戦争への反省と恒久平和への願いをもとに様々な取り組みが行われてきました。現代における平和の問題は、単に戦争や紛争がない状況にとどまらず、核兵器開発やその保有と配備、構造的暴力としての経済の南北間格差や環境破壊、エネルギー問題や食糧問題等様々な側面を含んでいます。本講義では、人文・社会・自然科学各系列のスタッフによるオムニバス形式で、多角的に「平和」の問題を考えてゆきます。

【担当教員】

成嶋隆、石崎誠也(法学部)、糟谷憲一(人文学部)、宮園衛、山崎健、小林昭三(教育学部)、加村崇雄(農学部)、関根征士(工学部)、赤井純治(理学部)

【講義計画】平和をめぐる現代、過去そして未来

・現代における「平和」

a、日本国憲法の平和理念

b、平和協力と国際貢献

・歴史にみる「戦争と平和」

a、近代史における戦争と平和

b、教科書と歴史認識

c、オリンピックと平和

・地球環境の未来と「平和」

a、原子力と平和

b、エネルギー問題と平和

c、地球環境問題からのアプローチ

受講学生は一四〇名程度、授業には「コーディネーター」役の教員が学生と一緒に聴講しており(決して勤務評定をしているわけではない!)、授業担当者は担当者ノート(感想、概要、連絡事項等を記録)と講義資料を次の担当者に渡している。ただ、最初の試みという点と実講義時数が半期十一週しかとれないことから、教員・学生ともスケジュールに余裕が欲しいと

表紙のことは

北海高等学校に建つ 「わだつみ」の像

坂 東 克 彦

なげけるか

いかれるか

はたもだせるか

きけ

はてしなき

わだつみのこえ

十一月二日北海道出張の折、札幌の豊平川のほとりにある高校野球の名門校北海高等学校を訪れた。

同校は明治十八年、北海英語学校として創立され、北海中学校、北海高等学校として今日に至っている。この間、野呂栄太郎、黒川利雄、稲村隆一など幾多の人材を世に

の感想が多い。学生の意見としては、教員が一方的にしゃべらないでほしい、もっと討論の時間を取ってほしい、他人の意見を聞きたい、色々な角度（人文・社会・自然科学）からの話が聞けるのでよい、今まで習っていた事が表面的だった事がわかった、自分も何かをしなくてはいけないのではと思った等、様々な感想が寄せられている。

現在、授業が修了していないので最終的な評価はな

されていない。次年度以降の構想としては、①通年四単位の授業とし、学生間の討論の時間を増やしたい、②講師陣の討論会を公開する、③受講学生で委員会を組織し、授業の進め方への要望、新聞の発行、コンパの企画（？）等を運営させたいなどといった点を考えている。

（やまざき けん 新潟大学教育学部・生理学）

送り出した。現校長幸村欣司氏は本県間瀬の出身である。

先日、同期の盟友浜口武人君から昭和六〇年、北海高等学校創立百周年を記念して同校出身の著名な雕刻家本郷新氏の不巧の名作「わだつみのこえ」像が母校に迎えられ、いま生徒通用門前に立っていると聞き、心を踊らせて同校を訪問した。

ななかまど、かえでなど美しい紅葉のなかで、風雪に耐え試験を乗り越えてきた「わだつみ」の像は、いま私たちに何を語りかけているのだろうか。